

「きよめの成熟に至らぬ危機」

飯塚 弘道

序：きよめの経験をした人は多い

きよめの経験をしたと思っている人は多い。今年夏、聖化協力会青年委員会が調査した「きよめについてのアンケート集計表」において、「自分はきよめられていると思いますか」という質問には、552人中、57.6パーセントの318人が「きよめられていると思う」と答えている。この結果を見て、きよめの経験をした後に、その人の受けたきよめがいかにか成長していくかを考察することの重要性を感ずる。

1. 何がきよめの成長を阻んでいるか。

まず、聖書的きよめの再確認が必要である。神が私たちに召されたのは、清くなるため（Iテサロニケ4：7）であり、きよくならなければ、誰も主を見ることはできない（ヘブル12：14）のであるから、聖なるものとされなさいと命じられている（Iペテロ1：16）。

聖書的きよめとは「イエスの血が、すべての罪より私たちにきよめる」（Iヨハネ1：7）とあるように、古き人がキリストと共に十字架につけたことにより、罪から解放され「この罪の体が亡び、わたしたちはもはや、罪の奴隷となることがない」（ロマ6：6、7）状態である。だから「罪に対しては死んだ者であり、キリスト・イエスにあって神に生きている者であることを認めるべき」である。精算すべきであると勧められている（ロマ6：11）、これは次のようにも言える。キリストの十字架の事実に対する信仰の合体。その信仰の合体に基づく信仰の決算。その信仰の決算に伴う信仰の従順、以上の四段階に伴う当然の恩寵。これがきよめである。

また、次のようにも言える。きよめとは全き心をもって神を愛し、これに信任する状態である。いつでも、どこでも、神がなれと言われるままになり、なせと言われるままを行うところの、心と生活を言う（サムエル・ブレングル）。「キリストわが内に生きたもう、それがきよめである」（竹田俊造）だから、私たちは「全き人となり、神のみむねをことごとく確信して立つ」（コロサイ4：12）者でありたい。

きよめの成長を阻んでいるものは、

(1) 聖書的きよめの事実に対する無知と誤解である（ホセア4：6）

神の絶対の恩寵（私たちは生ける神の宮である。IIコリント6：16）を知り、罪のおそるべき、憎むべきことを知り、単純なる信仰と服従によって、きよめを受けることができる。「これは、引いて、加える、瞬間のプロセスである」（ブレングル）。

(2) 献身の不徹底である

からみつく罪に対する、断固とした態度である。恵みの手段である聖書研究と密室の祈り、光に対する従順をしているなら、どこまでも従う決意が必要である（ヨハネ2：2）。

(3) 不完全な信仰である。

誠実な心と疑いをさしはさまない信仰。「神が内住されると約束されている。もし、この事実の意味する高さ深さを知るべきほどに知ったら、どのような障害があろうとも、自分がきよめられたいと求めずにはおれないでしょう」（B. F. バックストン）。

2. 何によってきよめは成長するか

(1) 他者へのあかし、祈り、みことばを読み、きよめをうけた人と交わり、喜びを持って自分のあかしを慎重に語り、わかち合う。

(2) いつも自分のなすべき分と、神がしてくださる分を心構え、全く神に委ねる。

(3) 救霊の熱情

3. きよめが成長していくために避けるべきものとは何か

(1) アブラハムが献身の表明をしたときに（創15章）荒き鳥がその献げものにおいて来たように、サタンのそそのかしに、毅然とした態度を取り続けること。

(2) 感情を拠り所としないで、みことばに固く立つこと。

(3) 世を友とする生ぬるい信仰。これは敵とすることである。ヤコブ4：4